

シャイネスが作り笑いに及ぼす影響

栗 林 克 匡

シャイネスが作り笑いに及ぼす影響

栗林 克 匡

目次

- I. 問題
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- 引用文献

I. 問題

我々は日常生活の中で様々な感情を抱き、それを表出している。面白ければ笑い、悲しければ泣く、腹が立てば怒るなどは自然な感情表出といえるであろう。しかし他者との関わりの中で、我々は感じた感情をそのまま表情に表すわけではない。感情の表出として特に表情に注目した Ekman & Friesen (1975) は、表情を制御するパターンとして、実際に感じている感情の表出を修飾したり、その感情の表出を調節したり、そのメッセージを偽装するといったことを挙げている。修飾とは、元来感じている感情を別の感情を付け加えることである。彼らによると、微笑はもっとも頻繁に用いられ、「怒り+微笑」「悲しみ+微笑」「恐怖+微笑」などの組み合わせでニュアンスを生み出すとしている。調節とは、本当に感じている感情の強度が実際以上に強めたりあるいは弱めたりすることである。偽装とは、本来の感情とは別の表情を作り出すことで、(a) 何も感じていない感情の表情をする擬態、(b) 感じている感情を表情に表さない中立化、(c) 感じている感情の代わりに感じていない感情の表情をする隠蔽の3つの形がある。本研究では、表情の制御として比

較的用いられやすいと思われる笑いの表情(作り笑い)に注目する。

作り笑いは、面白おかしいといった自然な感情によらない、表向きだけの笑顔を伴う笑い反応である(押見, 2002)。押見(2000)は、ネガティブな感情を解消・隠蔽しようとする意図の“感情制御”，場を和ませ緊張的雰囲気気を解消したり場を盛り上げようとする意図の“雰囲気操作”，他者の行為を矯正・統制しようとする意図の“行為統制”の作り笑いがあることを見だし、このうち感情制御と行為統制の作り笑いは、公的自己意識と正の相関があることも明らかにしている。

本研究では、公的自己意識とも関連深い特性シャイネスに注目する。公的自己意識と対人不安の間には正の相関があることが確認されている(菅原, 1984)。シャイネスは「他者から評価されたり、評価されると予測したりすることから生じる対人不安と行動の抑制という特徴を持つ感情-行動症候群」である(Leary, 1986)。シャイネスの高い人は、口数が少なく自己開示に乏しい、声が小さく口ごもる、視線を合わせないなど回避的な行動や過剰な微笑や他者への同意など防衛的な行動といった特徴がある(Nelson-Jones, 1990)。シャイネスと作り笑いの関連について直接検討した研究ではないが、崔・新井(2000)は、シャイネスと一般的な感情表出の制御との関連について検討している。その結果、シャイネスの中でも対人関係に対しての「不合理な思考」に関する項目で得点の高い人は、本心とは逆の感情を表出してし

まうこと（怒ってないのに怒っているように表したり、好感を持っているのに好感を表さないなど）が多く、親密な人間関係になりにくいという“非仲間志向的制御”や、相手の感情に合わせて自分の感情を大げさに強調する“同調のための強調的制御”を多く行い、またシャイネスにおける「過敏性」に関する項目で得点の高い人は、相手と反対の感情を表さないようにする“同調のための抑制的制御”を多く行うことが明らかとなった。

ではシャイネスと作り笑いとの関連はどのようなものになるであろうか。崔・新井（2000）の結果からは、シャイネスの高い人は、自分自身の感情に素直に笑うことはしないが、相手に合わせようとする同調的笑いが起こりやすいと思われる。また公的自己意識と対人不安とは正の相関がある（菅原, 1984）ことから、押見（2000）と類似した結果が予想され、シャイネスが高い者は、感情制御や行為統制に相当する作り笑いを行いやすいと考えられる。

ところで押見（2002）は、作り笑いに影響を与える要因として公的自己意識の他、作り笑いをを行う相手との対人関係の親密さの程度を加え検討している。その結果、公的自己意識は全てのタイプの作り笑い反応において影響しており、公的自己意識高群の方が低群よりも作り笑いを多く行っていたことが確認された。ただし“表出制御（自分自身の真の感情を隠蔽したり偽って表出するような反応）”の作り笑いは、公的自己意識の高い群で親密度の低い相手に対して行われやすいという交互作用も見いだされている。この押見（2002）の結果を考慮し、本研究でも作り笑いに影響する要因として相手との親密さの程度を取り上げることとする。作り笑いのタイプによっては、シャイネスの要因と対人関係の親密さの程度の要因の交互作用的効果が表れると予想される。そこで本研究では、対人関係の親密さの程度を絡めながらシャイネスが作り笑

いに及ぼす影響について以下のような仮説を立て検討する。

仮説1：場を和ませ緊張的雰囲気や解消したり、場を盛り上げようとする意図で積極的に行われる雰囲気操作的作り笑いは、シャイネスの低い人の方が高い人よりも行われやすいだろう。

仮説2：ネガティブな感情を解消・隠蔽しようとする消極的な意味合いの強い感情制御的作り笑いは、シャイネスの高い人の方が多く、それは特に親密さの低い相手に対して顕著にみられるだろう。

なお本研究では探索的に、一般的な作り笑いの頻度・相手の作り笑いに対する感受性・作り笑い時の感情といった基本的情報についても尋ね、シャイネスとどのように関連しているかも併せて検討する。

Ⅱ. 方法

調査参加者：大学2～4年生の148名（男性31名, 女性117名）。平均年齢は20.19歳（SD = 0.94）であった。なお調査は大学の講義の一部を利用して行われた。

場面の設定：作り笑いの相手の親密さを操作するために「最も親しく付き合っており、お互いに個人的な事柄を親しく話し合っている友人」あるいは「顔をあわせれば日常会話はするが、個人的な事柄を話し合うほどの付き合いではない知人」のどちらかを想定させた。
質問紙の構成：性別・年齢など基本的属性の他、以下の項目に回答させた。

①想定した相手の親密さの程度：想定した相手にどれほど親近感を感じているかを、「1. 弱い感じしかもっていない」から「5. 非常に強くもっている」の5段階で評定させた。またどの程度重要な付き合いと考えているかを、「1. 重要であるとはいえない」から「5. 非常に重要である」の5段階で評定させた。

②作り笑い反応尺度：親密さの程度を操作したいいずれかの相手を想定しながら押見（2002）の作り笑い反応尺度20項目について、「1. 行わない」から「5. 非常によく行う」の5段階で評定させた。

③普段の作り笑いの頻度・感受性・感情：特に相手を想定せず普段の作り笑いに関する基本的な事柄を測定するため、下村・関口・工藤（2006）の嘘行動に関する質問紙の「嘘」の部分を作り笑いに変え、文章が通るように変えたものを一部援用した。「作り笑い頻度（人と話していて、つい作り笑いをしてしまうことがある）」の1項目、相手の作り笑いに対しての感受性について「作り笑い解読力（他人の作り笑いを見破るのがうまい）」「作り笑いへの猜疑心（人の話を聞いていて、相手が作り笑いをしてるのではないかと感じることもある）」の2項目、作り笑い時の感情について「作り笑い見破られ不安（作り笑

いをしたとき、作り笑いを見破られるのではないかと不安や恐れを抱いたことがある）」

「作り笑いへの罪悪感（作り笑いをすることに罪悪感がある）」「作り笑い後の罪悪感（作り笑いをしたとき、悪いことをしたという気持ちになる）」「作り笑い快感（作り笑いをしたとき、だます快感を感じる）」の4項目、それぞれを「1. あてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」の5段階で評定させた。

④シャイネス尺度：相川（1991）の特性シャイネス尺度16項目を「1. あてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」の5段階で評定させた。

Ⅲ. 結果

1. 操作チェック

想定相手の親近感と重要性が条件通り差異があることを確認するために親密度（高・低）

表1 作り笑い反応尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子負荷量）

	I	II	III	IV	V
6. 仲間が笑っているときは、面白くなくとも笑うふりをする	.943	-.066	-.171	-.119	.107
7. 自分の内心の不愉快さを悟られまいとして、作り笑いをする	.785	.009	.094	-.070	.038
9. 相手の話が理解できないようなときは、笑ってごまかす	.576	-.079	-.234	.236	-.062
15. 付き合いの中で、顔で笑って心で泣くような行為をする	.485	.135	.092	.099	.110
17. 内心今日はつき合いたくないと思うときでも、会えば笑顔で接する	.470	-.013	.223	-.113	-.241
16. その場の雰囲気のを和らげるために、わざと笑い顔を多く見せるようにする	.455	.088	.299	.074	-.079
19. 深刻な身の上話を笑顔を変えて話す	-.020	.755	-.153	.056	-.069
5. グループの和を壊すような行為をした仲間をからかって笑いものにする	-.126	.630	-.060	-.089	.190
18. 友人のへまな行為を見てわざと大笑いする	.085	.620	-.131	-.039	.046
14. 話のネタとして自分の失敗を笑いながら話す	-.019	.477	.203	-.048	.157
20. 一緒に誰か地位の高い人と会う前などには、笑顔を見せ合う	.007	.469	-.031	.199	-.158
8. 一緒のときは、相手を笑わせ、自分も笑うようにする	-.020	.316	.228	.096	-.292
1. 自分が悲しい気分のときに会う際は、特に笑顔を示そうと心がける	-.141	-.200	.850	-.042	-.010
3. 会っているときには、笑顔を決やさないようにする	.012	-.074	.587	.141	-.038
4. 一緒にいるところで自分が何かへまをしたようなときは、照れ笑いをする	-.020	.292	.484	-.114	.108
2. 失敗の落ち度が相手にあるとき、笑顔で接するようにする	.146	-.074	.414	.184	.221
12. 怒った後に、笑顔を見せて相手を許すようなことをする	-.070	-.057	-.028	.886	.108
11. 相手が不愉快そうとき、わざと笑顔で接するようにする	.014	.009	.046	.533	-.018
10. 一緒に何か怖い目に遭ったようなときは、笑い顔を見せようと努める	.063	.054	.059	.435	.021
13. 別のグループをからかって仲間同士で笑い合う	.052	.118	.071	.086	.721
固有値	4.674	2.756	1.429	1.339	1.280
累積寄与率(%)	23.368	37.147	44.293	50.989	57.391
因子間相関					
I. ごまかし笑い ($\alpha=.816$)		0.071	0.561	0.371	-0.308
II. 雰囲気操作 ($\alpha=.714$)			0.231	0.370	-0.055
III. 親密性維持 ($\alpha=.660$)				0.457	-0.321
IV. 感情緩和 ($\alpha=.640$)					-0.206
V. からかい					

表 2 条件別作り笑い反応 5 因子の平均値と SD および F 値

	シャイネス低群		シャイネス高群		シャイネスの 主効果	親密さの 主効果	シャイネス×親密さ の交互作用
	親密低条件	親密高条件	親密低条件	親密高条件			
ごまかし笑い	2.75 (0.91)	2.40 (0.83)	3.08 (0.78)	2.53 (0.92)	2.63	9.98**	0.52
雰囲気操作	2.43 (0.73)	3.16 (0.86)	2.41 (0.60)	2.68 (0.63)	4.57*	17.85***	3.75
親密性維持	2.92 (0.88)	3.15 (0.89)	3.11 (0.77)	2.79 (0.52)	0.45	0.10	4.42*
感情緩和	2.21 (1.04)	2.35 (1.00)	2.11 (0.70)	2.11 (0.77)	1.36	0.23	0.26
からかい	1.59 (1.08)	1.82 (1.20)	1.69 (1.04)	1.68 (0.91)	0.01	0.37	0.45

※ () 内は SD * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

の 1 要因分散分析を行った。その結果、親近感は、親密度高群 (4.07) が低群 (2.72) より得点が高く ($F(1, 146) = 97.64, p < .001$)、重要度も親密度高群 (4.28) が低群 (2.96) より得点が高かった ($F(1, 146) = 73.23, p < .001$)。

2. 作り笑い反応尺度の因子分析

作り笑い反応尺度について主因子解プロマックス回転による因子分析を行った (表 1)。固有値の減衰状況を考慮し、5 因子解を採用した。第 1 因子は、「仲間が笑っているときは、面白くなくとも笑うふりをする」「自分の内心の不愉快さを悟られまいとして、作り笑いをすることがある」など 6 項目が高い負荷を示しており、“ごまかし笑い”と命名した。第 2 因子は「深刻な身の上話を笑顔を変えて話す」「友人のへまな行為を見てわざと大笑いする」など 6 項目が高い負荷を示しており、“雰囲気操作”と命名した。第 3 因子は、「自分が悲しい気分のときに会う際は、特に笑顔を示そうと心がける」「会っているときには、笑顔を決やさないようにする」など 4 項目が高い負荷を示しており、“親密性維持”と命名した。第 4 因子は、「怒った後に、笑顔を見せて相手を許すようなことをする」「相手が不愉快そうなとき、わざと笑顔で接するようにする」など 3 項目が高い負荷

を示しており、“感情緩和”と命名した。第 5 因子は「別のグループをからかって仲間同士で笑い合う」の 1 項目のみで“からかい”と命名した。なお第 1 因子から第 4 因子のクロンバックの α 係数を求めたところ、.640~.816 であった (表 1)。各因子に因子負荷量の高い項目 (.300 以上) の点数を加算し、項目数で割った値を以下の分析に用いた。

3. シャイネスと親密度が作り笑い反応に及ぼす影響

作り笑い反応 5 因子を従属変数とし、シャイネス (高・低) × 親密度 (高・低) の 2 要因の分散分析を行った。なおシャイネス得点の平均値 49.14 (SD = 12.81) を境に高群と低群に分けた。条件別の平均値は表 2 の通りであった。シャイネスの主効果は、雰囲気操作因子でのみ有意で ($F(1, 144) = 4.57, p < .05$)、シャイネス低群の方がこの作り笑いを行っていた。親密度の主効果は、ごまかし笑い雰囲気操作で有意であった ($F(1, 144) = 9.98, p < .01$; $F(1, 144) = 17.85, p < .001$)。親密度が高い友人には本心を隠蔽するようなごまかし笑いはあまり行わないが、雰囲気操作の作り笑いは行うことが明らかとなった。シャイネスと親密度の交互作用は、親密性維持で有意であった ($F(1, 144) = 4.42, p < .05$)。親密度の高い友人に対してはシャイネスの高

い人よりも低い人の方が関係維持に向けて配慮するようである。またシャイネスの高い人において、親密度が高い友人よりも低い知人に対して配慮するようである (図1)。

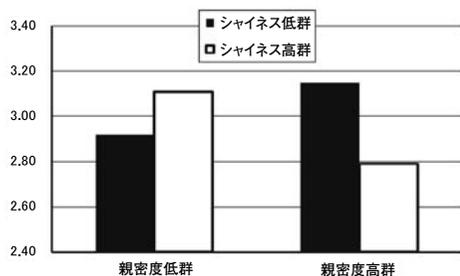


図1 親密性維持におけるシャイネスと親密度の交互作用

4. シャイネスと普段の作り笑いの頻度・感受性・感情との相関

シャイネスと普段の作り笑いの頻度・感受性・感情との相関を求めた (表3)。なお各変数の平均値を見ると、作り笑いはわりと行っており、作り笑いへの猜疑心も高い。作り笑い時の不安や罪悪感・快感は全体的に低いことが読み取れる。主な相関を概観すると、シャイネスが高い人ほど、普段つい作り笑いをしてしまうことが多く ($r=.21, p<.05$)、作り笑いを見破るのが下手であり ($r=-.18, p<.05$) いか、相手が作り笑いをしているのではないかと感じ ($r=.17, p<.05$)、作り笑いを見破られるのではないかと不安や恐れ

を抱いたことがある ($r=.20, p<.05$) と感じている。シャイネスと作り笑いへの罪悪感や快感には関連は見られなかった。作り笑いの頻度が多いほど、相手の作り笑いに対する解読力が高く ($r=.17, p<.05$)、猜疑心を抱きやすく ($r=.21, p<.05$)、また自身の作り笑いが見破られるのではという不安を抱きやすい ($r=.23, p<.01$) ようである。作り笑い頻度と作り笑いへの罪悪感や快感には関連は見られなかった。作り笑い見破られ不安、罪悪感、快感は相互に正の相関が見られた ($r=.30\sim.69$)。

IV. 考察

5つのタイプの作り笑い反応において、シャイネスおよび親密さの程度の2要因分散分析を行ったところ、シャイネスの主効果については雰囲気操作の作り笑いのみ有意であった。シャイネスの低い人の方がこの作り笑いをよく行っていた。このことから仮説1は支持されたといえよう。雰囲気操作は、他者を笑わせ和ませ、場の緊張を緩和したり、場を盛り上げたりするというタイプの作り笑いである。これは他者に積極的に働きかけ笑いを誘うような側面を持つため、シャイネスの高い人には難しいのであろう。その他の4つのタイプの作り笑いについてシャイネスの高い人が特に行うというわけではなかった。押見 (2002) では公的自己意識の高い人が作り笑い反応を

表3 シャイネスと普段の作り笑いの頻度・感受性・感情の相関

	平均値	S D	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
①シャイネス得点	49.14	(12.81)	.21**	-.18*	.17*	.20*	-.03	.03	-.03
②普段の作り笑い頻度	3.80	(1.02)		.17*	.21*	.23**	.03	.06	-.06
③作り笑い解読力	2.98	(1.24)			.16	.00	.19*	.15	.16
④作り笑い猜疑心	3.48	(1.10)				.32***	-.03	.17*	.20*
⑤作り笑い見破られ不安	2.33	(1.13)					.35***	.46***	.30***
⑥作り笑いへの罪悪感	1.99	(1.09)						.69***	.42***
⑦作り笑い後の罪悪感	2.03	(1.10)							.50***
⑧作り笑い快感	1.81	(1.07)							

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

多くすることを見いだしましたが、対人不安と公的自己意識には正の相関があるとはいえ、シャイネスについては異なる結果が得られたといえよう。

また親密度の主効果に関して、親密度が高い友人にはごまかし笑いはあまり行わないが、雰囲気操作の作り笑いは行うことが明らかとなった。ごまかし笑いは、押見(2000)での“感情制御”にあたるもので、面白くないとか不愉快といった本心を隠蔽して笑うタイプの作り笑いである。仲のよい友人に対しては、より本音を表出しやすく、ごまかす必要がないのであろう。また仲がよいので、抵抗なく積極的に働きかけ笑いを誘うという雰囲気操作をしやすいのであろう。

そしてシャイネスと親密度の交互作用が見られたのは、親密性維持の作り笑いであった。親密度の高い友人に対してはシャイネスの高い人よりも低い人の方が行っていたが、これはシャイネスの低い人は積極的な意味で友人との関係維持に向けて配慮していることと受け取れよう。一方、シャイネスの高い人において親密度が高い友人よりも低い友人に対してこのタイプの作り笑いを行っているが、これはシャイネスの高い人が親密度の低い知人との関係を積極的に維持していこうというよりは、自己防衛的な意味で笑顔を見せることで無難な人当たりのよい印象を与えようとしているのではないだろうか。押見(2002)の結果を受けて、仮説2「ネガティブな感情を解消・隠蔽しようとする消極的な意味合いの強い感情制御の作り笑いは、シャイネスの高い人の方が多く、それは特に親密さの低い相手に対して顕著にみられるだろう。」を立てたが、ごまかしの笑については交互作用は見られず、仮説2は支持されなかった。ごまかし笑いは、シャイネスという個人差要因よりも、親密度という対象人物の要因による影響が大きいといえよう。

普段の作り笑いに関する基本的な項目の結

果から、まず作り笑いの頻度については、シャイネスの高い人ほどつい作り笑いを行うようである。これは友人・知人を想定した作り笑い反応尺度への回答結果とは矛盾している。普段の対人関係の中では、初対面の相手や自分よりも高い地位の相手、あるいは非常に親密度の高い恋人など、友人以外の相手も含まれていることが影響していると考えられる。この点は今後の課題として検討の必要があるだろう。またシャイネスの高い人は作り笑いを見破るのが苦手であり、他者の表情を解読するスキル(堀毛,1994)が不足していると考えられる。苦手にもかかわらず、相手が作り笑いをしているのではないかと感じやすいことから、実際よりも不当にネガティブな認知を行っている可能性が伺える。さらにシャイネスの高い人は、作り笑いを見破られるのではないかと不安や恐れを抱きやすく、この結果は、自分の表情を上手にコントロールするという記号化スキルの不足も関係していると考えられる。押見(2000)は作り笑いを社会的スキルと考えており、この結果はシャイネスの低い人の社会的スキルの高さを反映しているともいえよう。シャイネスと作り笑いへの罪悪感や快感には関連は見られなかったが、これはシャイネスに関わらず、回答者にとって全般的に作り笑いは強い感情を引き起こす行為ではないと捉えられていることが影響している。

※本研究の一部は日本社会心理学会第52回大会で発表された。

※本研究の実施にあたり、西嶋まゆみ氏の協力を得ました。記して感謝いたします。

[引用文献]

相川 充 (1991). 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究
心理学研究, 62, 149-155.

- 崔京姫・新井邦二郎 (2000). 感情表出の制御と親和動機及びシャイネスの関連について 筑波大学心理学研究, **22**, 161-166.
- Ekman, P. & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the face*. New Jersey: Prentice-Hall. (工藤力 (訳) (1987). 表情分析入門—表情に隠された意味をさぐる— 誠信書房)
- 堀毛一也 (1994). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, **34**, 116-128.
- Leary, M. R. (1986). Affective and behavioral components of shyness: Implications for theory, measurement, and research. In W. H. Jones, J. M. Cheek and S. R. Briggs (Eds.), *Shyness: Perspectives on research and treatment* (pp27-38). New York: Plenum Press.
- Nelson-Jones, R. (1990). *Human relationship skills: Training and self-help*. London: Cassell Publishers Limited. (相川 充 (訳) (1993). 思いやりの人間関係スキル—一人でできるトレーニング— 誠信書房)
- 押見輝男 (2000). 社会的スキルとしての笑い 立教大学心理学研究, **42**, 31-38.
- 押見輝男 (2002). 公的自己意識が作り笑いに及ぼす影響 心理学研究, **73**, 251-257.
- 下村陽一・関口洋美・工藤力 (2006). 欺瞞尺度開発に向けての発展的研究(Ⅱ)—パーソナリティ・タイプと嘘行動の関連— 大阪教育大学紀要第Ⅳ部門, **55**, 101-107.
- 菅原健介 (1984). 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み, 心理学研究, **55**, 184-188.

[Abstract]

The Effects of Shyness on Forced Laughter

Yoshimasa KURIBAYASHI

Forced laughter is a laughter reaction with an ostensible smile that does not depend on natural feelings to be funny. This study examined the effects of shyness on forced laughter. A total of 148 participants were asked to imagine either their friend or acquaintance, and to indicate how often they exhibited forced laughter with the target person. They also answered a Shyness Scale, frequency of forced laughter, and sensibility and affection for forced laughter questionnaire. Five types of forced laughter were found by factor analysis: disguise, atmosphere control, intimacy maintenance, affect moderation, and teasing. Persons with low shyness reported more frequent use of atmosphere control than those with high shyness. When the target person was a friend, low shyness persons often used the intimacy maintenance type of forced laughter. Assuming that forced laughter is as a social skill, these results reflect that low shyness persons are competent in social skills.